

蝶の博物詩

生態46

蝶の生態写真



ナガサキアゲハ 雌
(1998年6月27日 奄美大島)

photo by

Nishiyama



ナガサキアゲハ 追尾する雄(写真下)
(2003年3月30日 奄美大島)

蝶の博物詩

生態46

蝶の生態写真

蝶の生態写真を撮り始めたのは還暦のころからである。いまや膨大なスライドを抱えて往生している。元来、凝り性なので、これまで皮膚のほか、口腔、爪、外陰、眼などの図鑑のための臨床写真を集め、“アトラス屋”と揶揄されたこともある。停年後は職がなく、まさにチョウ屋となった。チョウ屋といっても蝶の売買を生業とするわけではなく、蝶を採集する人、蝶が好きな人という程度の意味である。

チョウ屋ならば誰でも、まず日本産の蝶全種の蒐集を目指すであろう。しかし、全種撮影は停年後の老人には難しい。小学生のときの土地鑑があり、本邦の蝶の約60%の種類が生息する長野県の野尻湖の近くに山小屋を作り、主なフィールドとした。昔取った杵柄で、始めのうちは面白いように多種の蝶に会え、撮影できたが、やがて里山に農薬の空中散布が行われ、草原に枯草剤がまかれ、高速道路が通るに至って、蝶は激減した。それに伴い、冬は八重山諸島の離島に、夏は北海道にと、フィールドを移していった。

戦前、小学生のころは捕虫網を持って人気のない高尾山を独りで歩いたが、今度は違う。どちらが倒れても助けを呼べるようにと、家内が行動を共にし、蝶を探し、撮影もしてくれた。

すぐ夢中になる性格なので、四万十川の崖から落ちて見えなくなったり、日高山系の草叢で、待ち構えていたマダニの大群に咬着されたり、黒島の森の小道で牛と対峙して動けなくなったり、数々の珍事が絶えなかった。

蝶の生態写真撮影でもっとも重要なことは、美しい翅ではなく、蝶の目にピントを合わせることでと気が付いた。愛情を持って蝶に近づくと、その複眼には驚きや好奇心、時には友情までが現れて微妙に変化するように思えてならない。クジャクチョウのように美しい翅を拡げて、眼玉模様を見せてくれることもある。ファインダーを通しての魂の交流、だから私は一貫して一眼レフの銀塩カメラを使用している。

こうして撮った183種の蝶の素人写真を、本誌の17巻(1995年)から載せていただいた。近年、デジタルカメラの進歩は著しく、連続写真、高感度、高速度撮影が可能となり、蝶の飛翔の姿も鮮明に撮れるようになった。もうアナログ、銀塩カメラをぶら下げた老人の出る幕ではない。

思えば皮膚科に入局したとき(1953年)、未だムラージュの最後の時代であった。外来に2人の技術者がいて、顔にlupus vulgaris(?)の癰痕のあるI氏はまさに名人の域に達していた。教授の臨床講義の前夜、薄暗いムラージュ室で標本を選ぶのは気味が悪かった。その後、カラー写真を晴天の日に限って、病院の屋上で長い露出時間をかけて撮ったが、文句をいう患者は一人もない。“記録に残してくれて有難う”といった患者や、可愛い笑顔を遺した美しいSLEの患者などを思い出した。

西山茂夫

*蝶の博物詩は最終回です。長い間ご愛読ありがとうございました。